

『蚕桑輯要』について、各々の構成・成立事情、及び各書間の相互関係などを考察されたものである。何書が何石安自身の「オリジナルなものであるのに対し」、尹書は何書に、沈書は何書及び楊名颺『蚕桑簡編』に依拠していたが、各書ともに「それぞれの経験および在地の状況に応じ」たものであり、「実践的・実用的性格が貫徹していた」とされる。

以上、各分野にわたる労作を十分に理解し得なかつたのではないかと恐れるものである。また浅学なる評者の勝手な妄言を述べさせて頂いた。数々の非礼をお詫びし、執筆者各位の御寛恕をお願いする次第である。

最後に、小稿において触れることのできなかつた論題を提示して擱筆する。

『星論集』

- 逸文唐令の一資料について……………愛宕松男
- 唐代後期の常平倉……………船越泰次
- 唐代後半期における巡院の地方行政監察業務に
ついて……………高橋継男
- 唐宋時代における水利と地域社会……………斯波義信
- 北宋時代における回紇商人の東漸……………佐藤圭四郎
- 南宋代の和羅政策について——江西南西路を中心と
して……………地濃勝利
- 八旗寛羅佐領考……………細谷良夫

批評と紹介 神田

台湾の土地公信仰と沖繩……………窪 徳忠
なお『中山論叢』には、中山八郎氏の「私の学習記録」が
取められている。

- 『中山論叢』燎原書店 一九七七年・一二 A5 三八一
頁 六〇〇〇円、『星論集』星斌夫先生退官記念事業会
一九七八・一 A5 四二二頁 七〇〇〇円

宮中檔雍正朝奏摺

神田 信夫

周知のように台北の故宮博物院には膨大な量の清代の檔案が蔵せられ、先年来その整理と公刊が着々と進められている。先月（一九七八年七月）同地で台湾大学の主催によって開かれた「国際清史檔案研討会」の際には、参加者のために一日同院において清代の檔案の特別展覧が行われ、殊批のある奏摺はじめ各種の珍貴な檔案が多数陳列された外、奏摺を送るのに用いられた摺匣や夾板なども並べられ、一同の目を眩らせたものであった。すべて十五万余件に及ぶ宮中檔案は先年その整理が完了し、カードによって容易に検索できるようになったが、その数を上まわる軍機処檔案もこれまた最近

整理が終り、同様にカード索引も作成された。気の遠くなるような膨大な数量の檔案の整理に黙々として精進されている当事者の方々には、全く敬意を表せざるを得ない。

故宮博物院ではまた檔案などの文献を広く公開し、或いは直接閲覧させたり、或いは写真版として公刊したりするなど、研究者へのサーヴィスに非常な努力を払っている。世界の学界にとってまことに大きな幸せと言わねばならない。ここ十年足らずの間に、同院では『旧満洲檔』『袁世凱奏摺專輯』『年羹堯奏摺專輯』の大冊を刊行すると共に『故宮文獻』なる季刊誌を発行して檔案の景印に努めてきたのであったが、何といっても最大の事業は宮中檔奏摺の網羅的な景印であろう。先ず一九七三年六月から七五年七月にかけて光緒朝の分が『宮中檔光緒朝奏摺』と題して全二十六冊刊行され、ついで七六年六月から康熙朝の分が刊行され始めた。私はその都度本誌(第五十六卷第一号、第五十九卷第一・二号)に紹介したが、当時まだ漢文の部全七冊が刊行されたのみであった『宮中檔康熙朝奏摺』は、その後一九七七年三月に至り満文の部全二冊も刊行された。もっともこの二冊の実物を私が初めて手にしたのは同年秋になってからである。そのため先の紹介では触れられなかったが、満文の大部分は康熙三十五年・六年の康熙帝のガルデン征討に関するものと、同四十五年以後の杭州織造孫文成の奏摺および同五十一年以後の初め

福建巡撫で後に閩浙總督となった Gioroi Mamboo (賞羅滿保) の奏摺で、いずれも史料として極めて貴重なものである。

この『康熙朝奏摺』の巻頭に掲げられている蔣復璁院長の序によると、康熙朝が完了した後は雍正、乾隆と降って威豊、同治朝に至るまで継続して出版することであったが、その約に違わず早くも一九七七年十一月には『宮中檔雍正朝奏摺』第一輯、翌十二月には同第二輯が刊行された。やはり本第一輯の巻頭に掲げられている蔣院長の序によると、これまで宮中檔の出版基金として使われてきた The American Council of Learned Societies の援助資金は已になくなったが、檔案の公刊が清史の研究に寄与する意義の実に深いのに鑑み、出版を中断しないため今後は故宮博物院自身の事業基金によって続刊するという。経済的に困難な檔案集の出版に対する蔣院長はじめ関係諸氏の苦勞は察するに余りあるものがあり、感謝の念を禁じ得ない。

さて宮中檔奏摺のなかでも、雍正朝の分は特に史料的价值が高く重要である。雍正帝は奏摺政治に最も熱心で、臣下からの奏摺に対して一々克明な硃批を精力的に書いた。帝は生前、自分が硃批をつけた奏摺の一部を選んで刊行する準備をしていたが、実際には没後乾隆帝によって完成された。いわゆる『雍正硃批論旨』である。本書については、戦後いち早

く宮崎市定、故安部健夫の両氏を中心に研究会が作られ、長年にわたって講読が続けられた。そのメンバー諸氏による研究成果が已に多数発表されていることは、いまさら言うまでもないところである。清朝史研究の第一等の史料ともいふべき『雍正硃批諭旨』のオリジナルと、それに数倍する量の同種の奏摺が今回景印されることになったわけであるから、その意義はまことに大きい。

故宮博物院では戦前から雍正朝の硃批奏摺に注意を払い、古く一九三〇年に『雍正硃批諭旨』に入っていない奏摺の目録を各具奏人別にまとめて『雍正硃批諭旨不録奏摺総目』と題して出版した外、同院から発行されていた『掌故叢編』『文獻叢編』『史料旬刊』などに若干の硃批奏摺を鉛印した。しかし硃批奏摺が写真版として公刊されるようになったのは最近のことで、一九七一年十二月に出版された『年羹堯奏摺專輯』において、年羹堯の二百件近い満文の硃批奏摺と共に八十九件の漢文のものを景印し、且つその附録に「臣工參劾年羹堯宮中檔原摺」として五十五件の諸人の硃批奏摺をも景印したのであった。私はそこに収録されている高其倬、田文鏡、李維鈞等の奏摺を『雍正硃批諭旨』所収のものとは対比してみて、奏摺の文章も硃批の字句も両者でかなり相違があり、『雍正硃批諭旨』は奏摺の原文を削除したり硃批の文字を修正したりしていることに直ちに気付いた。ついで『故宮文

獻』に、一九七二年三月発行の第三卷第二期から雍正朝の奏摺の景印が載録されるようになった。具奏人別にまとめ、先ず沈廷正、蔡珽等の奏摺から始まったが、同年十二月発行の第四卷第一期まで四冊出たところで編集方針が変り、宮中檔奏摺を続いて載録するのをやめ、同誌の「特刊」として今日みるように奏摺全部を網羅的に出版することになった。私は一九七四年六月発行の本誌第五十六卷第一号に『宮中檔光緒朝奏摺』を紹介した際、『雍正硃批諭旨』が原文書の文字を削除したり修正したりしている事実にも簡単に触れておいたが、相前後して楊啓樵氏は「清世宗竄改硃批」と題する論文を『錢穆先生八十歲紀念論文集』（一九七四年、香港、新亞研究所発行）に発表し、台北の故宮博物院で実物を直接調査した結果に基づき、百一条の実例を挙げて硃批の改竄について詳述された。さらに佐伯富氏は一九七六年一月発行の本誌第五十七卷第一・二号に「雍正硃批諭旨の原文書について」と題する論文を発表され、原文書のコピーによって『雍正硃批諭旨』にみえる奏摺並びに硃批の文字の異同を検討した結果を具体的に示された。いまや『雍正硃批諭旨』の利用には、原文書に当らねばならなくなったのである。

ところで『雍正硃批諭旨』には、具奏人別にまとめてすべて二百二十三人分の約七千件の硃批奏摺が収められているが、現在台北の故宮博物院には漢文二万二千三百七十余件、

滿文約九百件、併わせて二万三千件を超える雍正朝の奏摺が所蔵されているという。そのうち単なる請安檔や重録の複本を除いてもなお二万一千余件に達するそうである。『雍正硃批諭旨』所収の件数の三倍にあたる。同院所蔵の宮中檔奏摺は、康熙朝の分が漢文三千百余件、滿文八百余件であり、乾隆朝の分が漢文五万九千四百余件、滿文六十九件である。康熙乾隆兩朝は俱に六十年の長期にわたるが、雍正朝は僅か十三年に過ぎない。單純に量的な面から考えても、雍正朝の密度が如何に高いか知られよう。

今回出版された『宮中檔雍正朝奏摺』の体裁は、已刊の『同光緒朝奏摺』『同康熙朝奏摺』と同じである。第一輯は本文九百十二頁で、その前に序二頁と目録二十八頁がついており、第二輯は目録二十九頁、本文九百三十四頁より成る。本文はすべて奏摺の日附順で、毎頁上下二段に排列されている。第一輯は雍正帝が即位した康熙六十一年十一月の翌十二月から、翌雍正元年の十月まで十一個月分であるが、一番最初に康熙六十一年二月の奏摺が一件あるのは、康熙朝の分の補遺であろうか。第二輯は雍正元年十一月から同二年七月までであるが、四月に閏があるので十個月分となる。そして最後に補遺として雍正元年九月の奏摺二件が収められている。

初め『年羹堯奏摺專輯』や『故宮文獻』誌上に奏摺が景印された際には、朱墨二色刷りで硃批はその通り朱刷りになっ

ていたが、経費の関係から『宮中檔光緒朝奏摺』『同康熙朝奏摺』では全冊黒一色刷りとし、硃批には一々記号をつけて指示することになった。経済的にやむを得ぬこととはいえ、折角の硃批が黒色に印刷されるのを残念に思っていたのであったが、今回の雍正朝においては、特に真跡の硃批のもつ重要性を思慮して元通り朱墨二色刷りとされた。雍正朝の場合には硃批が概ね長文で、且つ奏摺の行間への書込みも少くないから、これが朱色で印刷されると一見して明かだ有難い。ただ喪中の際の墨批や藍批には、従前のように何か指示する記号をつけるなどの工夫があってもよいかと思う。なお目録の様式も、具奏の日附と具奏者の官職、姓名および奏摺の標題を記して従来と同様であるが、今回は『雍正硃批諭旨』に収録されている奏摺には、標題のあとに（ ）に入れて『硃批諭旨何函何冊』と示している。同書所収の該当のものとは対照するのに便利である。但しこの函数と冊数は同書の木版本によるもので、石印本とは冊数の分け方が異なることは言うまでもない。

史料集など完成したものを見れば何でもないようであるが、実際にその作成に当る者の努力と苦心は大変なものである。殊に今回のように朱墨二色刷りとなると、またそれだけ負担も大きいことと思う。仄聞するところによると、間もなく第三輯ができ、以後三個月おき位の間隔で一冊刊行され

るようであるから、予定されている雍正朝の分全三十冊の出版が完結するには今後数年を要することであろう。長年月にわたる仕事はまことに苦勞なことであるが、立派に完成する日の来るのを祈念してやまない次第である。最後に一言申し添えれば、根本史料の公刊という折角の大事業であるから、可能な限り慎重を期して頂きたいと思う。第一輯、第二輯を通覧したところでは、少々印刷の不鮮明な部分が若干あるが、今後はより細心の注意を払われるよう切望してやまない。

(第一輯、第二輯 B5版 台北 国立故宫博物院 中華
民国六十六年十一月、十二月)

ロイ・ホフアーニズ Jr. 著

砕けた波——中国共産党の農民運動、

一九二二—一九二八年——

片山 剛

まず、本書の構成を示すと、次の通りである。

序言

第一部 戦略

第一章 農村戦略の誕生

批評と紹介 片山

第二章 農村戦略家としての毛沢東

第二部 組織

第三章 革命の配置…国民党農民部

第四章 革命教育…農民運動講習所

第五章 大衆の組織化…農民協会

第六章 社会的背景…成功と失敗の説明

第三部 実践

第七章 革命の起源…海豊の彭湃、一九二二—一九二四年

年

第八章 依存政策…広寧、一九二四—一九二五年

第九章 敵の顔…花県、一九二六年

第十章 人民戦争の誕生…海豊、一九二七年

第十一章 革命の死…海豊、一九二八年

第十二章 中国農民運動の遺産

本書の標題『砕けた波』とは、一九二二—二八年に華南を中心に彭湃としてわきおこり、そして砕けちった農民革命の大波を意味するものであり、かつ、中国農村共産主義の父たる彭湃を高く評価せんとする著者の意図を表現したものである(序言)。本書は、のちに「人民戦争」として知られる農村根拠地戦略の誕生・形成について、延安時代よりも大革命期にその大きな根源があったこと、とりわけ、二〇年代の中国に特有な政治環境が、その誕生の、また二〇年代末の一時